

間おちたものであろう。パイプをとりけるのにかんりの力が要つた。大部屋の入院室には野中君の遺体があつた。大柄の人でほとんど焼けていたがすぐ分つた。室全体が焼けている。病棟西端に近く、根元から折れた大木のあたりに内野看護婦と倉橋看護婦が倒れていた。両君は焼けてはいなかつた。それだけに炎天の下に、反つて、哀れである。この三君はその後焼けのこり破片を組んで茶毘にふした。

内科との間に、旧物療科の建物を解いた木材が積みかさねてあつたが、全部焼けおちて平たくなつていた。こゝにも何人かの死体があつた様である。

美しい花壇も見る影もなかつた。ほんとうに一瞬にして姿つてしまつていた。何もなすことなく、死者に合掌して、病棟を後にした。

(当時耳鼻科勤務)

精神科教学教室

当時の医局員は高瀬清教授、松下兼知助教授、寺田文彦医学部仮卒業生、傭人伊藤三雄、倉田乙二両氏で外に有村シゲ子看護長以下十四名の看護婦が勤務していた。

被爆時の状況

高瀬教授は鹿島へ出張中で被爆をまぬがる。松下助教授は精神科助教授室、寺田先生は病室で被爆。伊藤、倉田の両氏も教室で被爆死亡す。他の看護婦は病棟で被爆し六名死亡。

松下助教授は裏山に避難後帰省療養す。

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
学部仮卒業生	寺田文彦
傭人	伊藤三雄
看護長	倉田乙一
看護長	有村シゲ子
嘱託	浜崎ルリ子
四年	岩崎松子
三年	竹谷良子
二年	磯田千代子
一年	井戸洋子

原爆と精神科教室

松下兼知

昭和廿年八月八日午前十一時過ぎ飛行雲をなびかして、浦上の上空を旋回する超スピードの敵機一機があつた。アレアレと見てゐる内に飛行雲は円形の中に十字を描いて投爆する事もなくそのまゝ消え去つた。解剖の故高木教授は空をそりくりかえつて見上げながら「奇態な飛行機だな」とニコツと笑つておられた。十二時には大詔奉戴式が行われ、故角尾学長の訓示の中に「地上に落ちない空中で爆発する新型爆弾が広島に落ちて、広島全市は焼失し、自分達は四里近い道を歩いて、汽車に乗りやつと帰つて来た」とあつた。法医の故国房教授はその話を聞いて、日本の運命は間近に迫つたとしみじみと語られたがその声は今尙耳にのこつている。思えば運命の皮肉は既に我々の足元迄きていた。

その翌九日、私は報国団本部の企画班長をしていたので早朝大学本部に集り、色々と防護の打合せをし、配属将校や故福田助教授達と敗戦の間近さを話し、敵陸上部隊が野母半島から上陸するか、矢上方面から上陸してくるかその場合を想定し、私共の取るべき作戦を練つていた。然し何一つ名案は浮ばない。只横穴や防空壕にかくれて日本刀で敵兵と相殺の外ないと幼稚な作戦に終るのみであつた。大学防衛、只私共の念頭にはそれ以外には何等の構想もなかつたのである。

運命の神は私を精神科教室へ呼び戻した。午前十時五十分頃であつたらうか、外来患者が一名診療に見えておられますと電話がかゝつて来た。

明日ともしれぬ日にと異様な感したが、私は鉄かぶと巻脚絆のまゝ病院に駆け下り、精神科助教授室にはいつたのである。鉄かぶとをぬぎ、白い手術衣を着ようとした時である。「ガラガラガラガラ……」と奇妙な音が十数秒以上も続いたのであろうか。一時耳をすました。北側の窓である。爆弾が自分の足元に落ちつゝあるのであろう。どうしよう。しばらく助教授室を右往左往した。北側上空に星光様の閃光がひらめいた。途端にグワラグワラと土壁が落ちてきた。これは全く瞬間の出来事である。ハテナー自分には意識がある。生きてるのであろうか。このまゝ死ぬ瞬間なのだろうか。考える余裕があつた。時間が経つ。ア、自分は救われたのだと直感した。爆弾の破片が死角をはづれ、死角の外に自分の位置があつたのだろうかと直感した。

頭からタラタラと冷たいものが頬に流れてきた、手でぬぐつた。血らしい。眼を見開いて見た。粒の太い灰が室内に、立ちこもつている。眼が見えない、アツ自分は両眼ともやられた。しばらくして東側にうす明るい空間が見えてきた。教室の花壇が見える。アツ眼が見えた。まだその時は全身は土壁や板や、洋服タンスの下にあつた。ガス水道のパイプにふれた。床下におちていたのである。力を出してはい出す事が出来た。狭い廊下から、イタイ、イタイとうめき声が聞えてくる。一人の看護婦が先生大丈夫ですかと駆けしてきた。背がいたい、鮮血である。ゲートルをぬいで全身をまいた。

瞬間私の頭には、大学本部の御真影が気になつた。守るのは私の任務であつた。

教室をふり捨て、外に出た。道は壊れてない。崖をすべり下りた。

大学学生二、三名小児科と門衛の間でブルブルふるえながら、痛い痛いと飛び回っている。小児科の婦長にあつた。白い手術衣まゝで右往左往していた。

大学裏門を出た。あたりには家はない。何処が何処やらさつぱり分らない。右寄りに土手を登つて、雨天体操場の上に出た。あたりには全く家はない。人もいない、家は積木の様に柱だけ重なつてゐる。見る見る内に、ポツポツとあちこちからマツチで火をつけけないのに自然発火して、燃え初めてきた。医専の学生が走つてきた。「元氣を出せ」と私はどなつた。途端にドツと前方へすべりころんだ。口から白いものを吐いてそのまゝ息がたえた。御真影を安置してある塚にはいつた。深さ三、四間もあつた。そこには、数名の学生、事務職員が呻吟していた。

私はもうこれまでだと思つた。塚の裏山によち登つてみた。そこは元楠などの大木がはえて私共の憩の場所であつた。その大木は、放射線状に、東南方向に葉一つつけず倒れている。山を登つた十字架の墓場まできた。そこに初めて二、三十名の生命の助つた学内の人々が坐つていた。小児科の森講師もはち巻して坐つておられた。墓石は左右に飛んでいる。教務課の根元氏（？）がこゝを去りましようといつた。私は一心に山を登つた。小道に出た。私は途端に意識を失つたのである。

その後の事はしばらくよく分らない。誰れか私を呼ぶ声がある。目を開いた。北村包彦教授の足にひつかゝつたのであろうか。こゝを去るより外に道はない元氣を出せといわれた。私は足をひきずりひきずりついて行つた。汽缶庫の吉村さんが私の肩をさゝえてくれた。喉が乾いて仕方がない。井戸の水を飲んだ。ギアツと吐いた。鉛糖水の様な味がした。

茶褐色のこげた裸の男女が、ふくれあがつてのたうちまわつている。塚の中に父さんが生理された助けてくれーと少女の音が聞えてくる。

ドカンと爆弾がおちたのか、浦上教会の御堂が一瞬にして倒れた。濛塵が空一杯舞い上つた。ポツポツ小雨が降つてきた。途中に豚が死んでいる。

裸の多数の男女が呻吟している。敵機の爆音がブーンブーンと聞えてくる。私は又氣力を失つた。その後の事はよく分らない。目がさめた私は道の尾の御寺の芝生の上に寝かされていた。

夜を明かした。翌朝道の尾から汽車にのせられて諫早に送られ、軍医の手当を受けて、島原鉄道で家族が疎開している島原へ運ばれた。

その後三週間チフス様の病状を呈し、徳先生、箆島助教授（当時）の治療を受けた。輸血二十三回、後で聞いたが白血球三千以下、鬼籍にいる一人と教えられていたとゆう。

頭髪はすっかり抜け手掌にも出血斑が出た。平（島原）の福田先生の毎日の注射、切開手術（ガラス破片を出した）を受けた。

病状に就いては委しく述べない。其の後私は二、三ヶ年肝腫瘍の診断で医大に入院した。これは原爆によるものかどうか今だに疑問に思つている。

高瀬教授（当時鹿島方面に疎開されていた）から聞いた事だが、原爆当時教室には三十三名いて三名助つたと。医局に七、八名の医員。学生ポリクリ十三、四名、看護婦五、六名、附添人の伊藤、倉田両人も見舞にいつていた。中江講師、瀬川助手、田中、坂上、楠木、曾、老岐君は軍医予備員として既に召集を受けて不在であつた。

今私は大陽の田舎にあつて観音石像を立て、死なれた故角尾学長初め職員、看護婦、大学学生、医専学生達の冥福を遙かに祈っている。

(三〇・五・一五)

物療科学教室

当時教室は内科と耳鼻科の間で木造建であつたので六月頃（昭和二十年）本館の二階と内科教室の地下の一室へ分散的に疎開。

永井助教授は部長として施副手補と共に、教育並びに診療に努めていた。

技術員として施景生、友清史郎、梅津純、小笹ハツエ、小笹トミエ氏が居た。教室勤務の看護婦としては久松シツノ看護長以下十三名であつた。

被爆時の状況

永井助教授は本館二階で受爆し、顔面に負傷、施副手補は元氣な者と共に救出作業に当る。

被爆直後、行方不明の看護婦八名の内五名、山下、浜、井上、吉田、大柳嬢の遺体は十日運動場で発見さる。その夜生き残り教室員で御通夜を営む。雇小笹ハツエ氏は当日休暇をとつて居て家野町の自宅で爆死す。

その後教室員は永井助教授の下に医療班をつくり西浦上の三山で被爆者の治療に当り八月二十二日解散する。